

問題をもちつ子供をどう見るか

青木誠四郎

一

私達が子供の保育にあたつてゐる場合、澤山の子供の中には、いろいろな問題をもつてゐる子供がゐませう。この問題をもつてゐる子供をどうしたら、問題を失くすことができるだらうか。どうしたらあたりまへの子供にすることができたらうか。それを考へる手順をどうしたらよいか。これがこゝで私に課せられた問題なのです。併し正直に申して、私もさう整つた理論があるわけではないので、かうしたらよい、あゝしたらよいと、はつきり申上げる事は、六づかしいのです。そこでこゝに述べますものも、また、私がこゝにも決定的なものを發表してない、いはゞ未定稿について、その極めて一般的なこゝに他ならないのです。不完全なところは、追々に治してゆくこゝにし度いと思ひますので、こゝはさうかき思ふさ云ふやうなこゝがありましたら御忠言を頂きたいと思ふのです。

さて、私達がかう云ふ問題をもつた子供達にぶつかつた場合、何が最初になされなくてはならないか云ひますと、それはやはり、その子供のもつてゐる種々な生活のいろいろな場面に觸れて、その子供がどんな性質をもつてゐるかを見てみるこゝ、いはゞその性格の現象記述をするさ云ふこゝにあるでせう。

この現象記述さ云ふこゝは、子供のもついろいろな生活の、いろいろな場面をよく見て、それがどんな風のものかさ云ふこゝを、觀察してゆくこゝなのですが、さう云ふ風にいろいろな生活に觸れてさ云つても、あらゆる方面に觸れてゆく

ミ云ふことは、到底できることではありません。そしてまた、子供の性質を見るのには、その性質の特徴のよく現れる場面ミさうでない場面ミがあるのですから、その要點要點を把えなくてはならないので、必ずしもあらゆる方面を見るの要はないのです。

では、どんな點を把えたらよくその性質を窺ふことができるか。これについては、性格ミ云はれてゐるものゝ性質上、子供の物事に對する態度を見ることミが大切ミ思ひます。物事に對する態度ミは、子供がいろ／＼な人に對してさうか、ミ云ふことゝ、物に對してさう云ふ態度をもつてゐるかミ云ふことゝに、分けて見る事ができるでせう。

人に對する態度ミは、その子供が他に對して内氣な態度をさるか、陽氣な心持で接することができるかミ云ふやうなこと、両親や、先生や、お友達に對してどんな態度でゐるか、云ふことをよくきくか、親しくするか、反抗するか、甘つたれるかミ云ふやうなことがそれなのです。物に對する態度ミ云ふのは、物事を几帳面にするかミか、物についての欲はさうか、物もちはさうか、物おしみをしないか、あるひは食物について、選り好みにこだはらないかさうか、ミ云ふことをあげる事ができませう。

かうした、子供について、いろ／＼窺つて來るミ、その子供のさう云ふ方面に問題があるのかミ云ふ事が、やゝ明かになつて來るでせう。例へば、この子供は非常にやりつばなしで困るミ思つたが、偏食でもある。云ふことミもきかぬ。そのくせ成人ばかり便りにしてゐるミ云ふ風に、見られたことミが綜合されて、その子供の問題が、少し輪廓を見せて來るやうなものです。人の性格ミ云ふのは、全體が關係し合つてゐるものですから、一方に何か缺點があれば、これは他の面に出て、その長短を形成るミ云ふ風になつて來るものですから、かうして輪廓をつくつて來れば、まづ性質の全貌ミ云つたものが見られるでせう。

かうして、大體のこみに見當がついて來て、この子供は我儘だ云ふやうなこみが、判つて來たら、次にはこれと關係した、いろ／＼な方面について、もつと詳しく性格の全貌を窺ふこみのできるやうな、さぐりを入れて見るこみが必要です。

このさぐりを入れるのに、さう云ふこみを眼あてにしたらよいだらうか。次にあげるものは、私が、アッケルソンの問題兒の示す現象事項を整理して、似よりによつて集めたものですが、これによつてさぐつて見るに、更に子供が、さう云ふ問題をもつてゐるかどうよほまで理解することができるやうに思ひます。

1、落ちつきのない神經質な子供に屢々存する性質

(1) 活動し過ぎる。(2) いろ／＼なことに手を出す。(3) 辛抱強くない。(4) 不眠症。(5) 睡眠不規則。(6) 安全感がない。(7) 恐怖心強し。(8) おじやべり。(9) 感情が變化し易い。(10) 夜中にうなされる。(11) 眠つてから動き易い。(12) 衝動的。(13) 抑制力の不足。(14) 自己統制力の不足。(15) 劣等感。(16) 自信の缺乏。(17) 嫉妬深い。(18) 爪をかむ。(19) 指を吸ふ。(20) 鼻をつまむ。(21) 不規則な食慾。(22) 食慾の缺乏。(23) 怒り易し。(24) 殘酷。(25) 火遊びを好む、等

2、喧嘩好きの子供に屢々存する性質

(1) 格闘する。(2) 挑戦的態度をとる。(3) 不作法。(4) 恐れ of 異常な缺乏。(5) 亂暴。6) 蹴る噛みつく。(7) 復讐すると脅す。(8) いぢめる。(9) 赤坊を傷ける。(10) 殺してやると脅かす。等

3、我儘の子供の有し易い性質

(1) 自己中心的態度。(2) つけのぼせる。(3) 自惚が強い。(4) そんな事は皆知つてゐると云ふ態度。(5) 食事中の不作法。(6) 餓鬼大將になりたがる。(7) 責任感の缺乏、等

±、強情な子供の屢々もち易い性質

(1) 友達ができない。(2) 感謝の念の缺乏。(3) 愛嬌なし。(4) 拒絶症。(5) すれる。(6) 意地悪。(7) 食事を拒む。(8) 他人に唾をかける、等

5、感じ易い子供に屢々見られる性質

(1) はにかみや。(2) 心配過度。(3) 疲れ易し。(4) 淋しがり。(5) 晝夢。(6) くよくよする。(7) 引こもり好き。(8) 恥しくて便通を我慢する、等

6、緩慢遅鈍な子供のもち易い性質

(1) 理解がおそい。(2) 被暗示性強く影響され易い。(3) 年下の子供と遊びたがる。(4) 友達からいぢめられる。(5) 泣き蟲。(6) 不器用。(7) 記憶が悪い。(8) 非進取的。(9) 遊びに對する興味の缺乏。(10) 身體がきかぬ、等

まづかう云つた種々の具體的な生活事實について見るに、この子供のもつてゐる缺陷がはつきり極めるやうに思はれます。そしてこの子供の有つてゐる主な缺點と共に、他にどんな點に缺點があるか云ふことが考へられて、子供の問題の種類がわかつて來ると思ひます。

かうして、所謂現象の記述ができて、その子供の問題が、どんな方面に互つてゐるか云ふ事が解るに、次に考へなくてはならぬのは、その原因がどこにあるか云ふ事です。この原因がわかるに云ふことが、その子供をさう導くか云ふことを知らせるものになることは、常識的にもよくわかる事でせう。

そこで、この原因ですが、その原因を考へるのに第一に思ひをいたして見なくてはならないのは、その子供がこれまでどんな風に育てられて來たか云ふ事です。子供の問題は、勿論その素質のことも大に關係しますが、素質だけで問題が出て來るのは、著しい異常な變質的な場合で、さうでない場合は、いづれも云つてよい程、育て方、躾け方、の上に問題が潜んでゐるに云ふべきでせう。

この育ての態度、躱げの方法について、何があたりまへであるか、云ふことは相當問題があるのですが、その極端な場合、問題ミすべき態度を考へて見るミ、凡そ五つ位の態度があるやうに思ふのです。第一は故意に放任するもので、子供のした放題に委せておくもの、第二はそれミ反對に、一々子供のする事に干涉するもの、第三は、御機嫌を害ぬまいミ溺愛するもの、第四は、親の心配が過ぎて、神経質ミも云ふやうに世話をやいたりいたはつたりするもの、第五は、親の機嫌で子供を可愛がつたり、叱つたりするもの、云ふのがそれです。大體親のミる態度は、これ等の五つのごれかに考へて見るミができるやうに思はれるのです。

では、この態度のされによつて、その子供が育てられて来たか、それを決めるのは、相當にむづかしい事です。親に、「子供を可愛がり過ぎはしませんか」云々「ききは」それ程にも思ひません。「いや決して」なご答へはするが、實際には相當に可愛がり過ぎミ見なくてはならぬやうな事が多いからです。これはさうしてもその育ての状態を、何か客観的な具體的な事項によつてつかまへて、それによつて育て方の如何を決定して見なくてはならないやうに思はれます。

次にあげるものは、私が、さう云ふこの参考にもミ思つて、子供の嬰兒からの育て方の標徴ミなるミを拾ひ上げたうち幼児期の育て方がきんなどであるかのさぐりを入れるための、躱げの具體的な項目をあつめたものですが、これによつて上のやうな態度のきんなのが、特に其の子供に濃く現れて來てゐるかを判断するミができません。

幼児期の育て方の態度を示す徴標(假案)

1. 食物について

(1) 子供の食物をどうしたらよいかに、いつも頭を悩ますか。

(2) 食事が進まないので叱るか。

(3) 間食を與へるか。

(4) 間食は大體分量を定めて與へるか。

(5) 間食は時間を定めて與へるか。

(6) 食事の分量は大體定めてゐるか。

(7) 食事の好きなものは、いくらでも與へるか。

(8) 嫌ひなものは食へなくてもよいとしてゐるか。

(9) 離乳はいつからさせたか。

2、睡眠について

(1) 子供は獨りで眠らせるか。

(2) 眠つた時はできるだけ靜かにするやうに氣をくばるか。

(3) おそくまで起こしておくか。

(4) 睡る時間と起きる時間は定まつてゐるか。

3、衣服について

(1) 厚着をさせるか。

(2) 薄着か。

(3) 氣候が變るとすぐに着物の加減をするか。

(4) 身なりは構はない方か。

4、動作について

(1) しばしば抱きあげるか。

(2) なるべく家の中にあるやうに仕向けるか。

- (3) 外で遊んでゐる時は、いつまでも放つておくか。
- (4) 遊びは何でも自由にさせるか。
- (5) 亂暴な遊びでも放つておくか。
- (6) 嗜遊びでもだまつて見てゐるか。
- (7) 子供が喧嘩をすれば、叱るか。
- (8) 子供が喧嘩をする時、相手方の子供を懲すようにするか。
- (9) 子供の喧嘩は放つておくか。
- (10) 子供が怖れるとき、いたはるか。
- (11) 子供が怖れるとき、叱るか。
- (12) 悪戯は放つておくか。
- (13) 悪戯は叱つて止めさせるか。
- (14) 子供が怒ると、何とかしてなだめようとするか。
- (15) 子供が怒つた時は、放つておくか。
- (16) 子供が怒れば、叱るか。
- (17) 子供が物を訊けば、大體答へてやるか。
- (18) 子供が物を訊くと、面倒くさくて叱言を云ふか。
- (19) 子供が物を壊したとき叱るか。
- (20) なるべく友達と遊ばせるやうにしてゐるか。
- (21) 子供が散らかしたものは、自分で片づけさせるか。
- (22) 床は自分でとらせるか。

(23) 玩具は欲しいと云へば、大抵のものは何とかして買つてやるが。

(24) 子供の泣くのにつり込まれて云ふことをきく方が。

かうして、子供がみんな風にして育てられてゐるかゞわかつて来れば、前の調べでわかつた子供の性質を照し合せて見るに、その性質の上の問題が、みんな風にして生じて来たものかゞ、凡そ解つて来ると思ひます。たゞこゝで、具體的に一つ一つの問題に遭遇した場合を考へて見る場合には、何と云つても、子供のもつてゐる性質上の生來性を見られるものが考へられなくてはならぬやうに思ひます。この子供の生來性をおぼしいものが、みんなものであるかについては、こゝで簡単にさう云ふ事は、むづかしいと思ひますが、たゞ、私ながら、従來子供の問題を取扱つて来て、さうも素質として考へなければならぬやうに思つてゐるのは、その子供の生れつきの衝動的な動きの強さ云ふこと、その子供が、内氣で陰氣な子供か、或は陽氣でさばくした性質をもつてゐるか云ふことです。内氣な子供には、さうも内氣の子供特有の問題があり、陽氣の子供には陽氣の子供特有の問題があるやうに思はれます。その上、心持の強い子供として考へて、はじめてわかる子供の問題に、それが非常に弱く子供の活動性の少いために出て来ると思はれる問題と、またあるやうに思ひます。

ですから、前述の子供の性質上の特徴を、この生來の性質を考へられるものと照し合せて見て、尙更に生育上のことを考へ合せて、そこで、はじめて、この子供のかう云ふ性質は、どこから出て来たのかゞわかるやうになるわけです。

さて、かう解つて来るに、子供をさう取扱つてゆかなくてはならぬかゞ、考へられなくてはならぬのですが、それについていまこゝで簡単にこれはかう、あれはあゝと明確に答へる事は困難です。だいいちさう云ふ矯正法については、尙不明なものが多く、はつきりこれを敘述する事はできません。またさう完全なものでなく、私が経験により、また多少文献なきにたよつて調べた結果、これはまづ大體かう取扱ふべきだ、それはかう扱つて見たらさうかと思はれる躰け方の方法は、ない譯ではないのですが、それを一般的にこゝで述べるには、尙澤山の敘述をしなくてはならないので、それをこ

こでしてゐる餘白がありません。

そこで、ごく一般的なことを申して見ますと、まづその原因がつきまめられたら、現在のその子供のゐる境遇から考へて、さうしたらその原因となるものが除けるか、それを考へて見て、そこから矯正の方法を考へてゆくべきものでせう。例へば子供を外へ少しも出さないでおいたために、人なれない子供になつた見られれば、できるだけ他の子供を遊ばせるやうにする。子供の好きなものならいくらでも食べさせるが、さうでないものは少しも食べなくてもかまはないと云つたやうなことで、偏食がつくられて來たことは、これは一定の方針のもことに、何でも食べさせねばならぬと云ふ方針を生むわけです。

たゞ、かうして原因から考へることは云ひましても、子供には既に一度問題ができてゐるのですから、夫に對して考へてゆかなくてはなりません。社會性がないからと云つて、すぐに遊ばせようとしてはいけないでせう。偏食だからと云つてすぐ何でも一人前に食べさせるは云ふわけにはゆきません。そこには徐々に進むと云ふ極めて大切な方法上の立場があるわけです。これと共に考へなくてはならぬのは、子供の生來性も見られる性質について考へをめぐらすと云ふことです。同じ處置でも内氣な子供は、陽氣な子供では、それに對する動き方が違ふやうに、躰けをして矯正してゆくにも、その點は非常によく考へなくてはならぬものをもつてゐるでせう。例へば内氣な子供は氣をひきたてるやうに、ひきたてるやうにゆかなくてはなりません。陽氣な子供には比較的さう云ふ方法がなくともよい、なきがそれです。

これを要するに、私達が問題をもつてゐる子供を見出したやうな場合には、まづその性質がどんな性質かをよくしらべ、その生育の状態と生來の性質とを考へ合せて、子供の性質に合つた矯正法を講じてゆくことなるのです。この事は理窟は至極簡單ですが、今日の事情としては、私達にはさう簡單でないのです。試みを重ね、方法を訂正して、根氣よくその處置をしてゆくのでなくては、充分の效を收めることはできません。